

平成8年度心身障害研究 「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

十代妊婦への面接調査 (分担研究：女性からみた妊娠、出産に関する研究)

分担研究報告書

分担研究者 北村 邦夫 (日本家族計画協会クリニック)
研究協力者 町浦美智子 (カリフォルニア大学サンフランシスコ校)

要約

十代で妊娠を継続している妊婦17名を対象に妊娠20週以降に面接調査を行った。妊婦の心理的、社会的な側面から、妊娠の動機、妊娠継続の理由、妊娠をどう受け止めているのか、また妊娠にどのように対応しているのかなど、十代妊婦の妊娠中の主観的経験を探求した。

面接時は16名が入籍を済ませていた。妊娠の動機は自分の生活を変えたいと思って積極的に妊娠した者もいたが、大半は予定外妊娠であった。しかし予定外妊娠の妊婦は妊娠を継続するにあたって、子供の生命の大切さ、また人工妊娠中絶を避けたいなど、あとで妊娠の意味付けを行っていた。約半数の家族は妊娠の継続に反対であったが、最終的には同意して、妊婦への心理的、経済的な支援の役割を担っていた。

妊娠中の生活については、妊娠の継続を決意したものの、仕事や学校をやめて家にいることが多く、友人とも疎遠がちになり、また回りに似たような妊婦もいない為に、暇で寂しいと述べていた。また妊娠中の体重コントロールは難しく、体重増加の心配をしている反面、妊婦だから仕方がないと受け止めている様子が伺えた。しかし、胎動を契機に胎児への愛着感情を述べており、母親になる意識の芽生えも見られた。最後に、社会的な支援のあり方として学校と妊娠の関係、妊娠中の経済的な援助、妊婦への保健指導等について考察した。

見出し語：十代妊婦、面接調査、主観的経験、妊娠の動機、妊娠の意味、妊娠の継続
妊娠中の生活

はじめに

過去10年間、日本における青少年の性行動は活発化している傾向にある。最近の東京都の性教育委員会の小・中・高校生を対象にした調査では、高校3年生の女子では性交経験率が34.0%と同年代男子の28.3%を初めて上回ったと報告されている(松本、1996)。

このような状況で特に十代女性の人工妊娠中絶の割合は1980年の4.7から(これは15-19才の女子人口1,000に対する比率)、1993年には6.6へと他の年代に比較すると上昇してきている(厚生省、1996)。また、十代女性で分娩をする者の割合は1994年で4.0と横ばい状態であるが、女性の立場からみて妊娠、出産はどうあるべきかという研究課題のもとに、十代の妊婦を対象に面接調査を行ったので、その結果を報告する。

研究方法

1) 目的：妊娠を継続している十代妊婦の心理的・社会的な側面から、彼女達が何故妊娠を継続しようと思ったのか、そして妊娠という状況にどのように対応しているのかなど、十代妊婦の主観的経験を把握・理解することにより、十代女性が妊娠を継続した場合の社会的な支援のあり

方について提言する。

2) 対象者：面接の対象者は十代妊婦で妊娠を継続している15才から19才までの妊娠20週以降の初産婦で、慢性疾患や入院を必要とするようなハイリスク妊娠を伴っていないこと、そして妊娠が確定した時点で未婚である女性としたが、妊娠中に入籍した女性も面接の対象者とした。対象者の妊娠週数を20週以降としたのは、この時期になれば妊娠を継続する意志も固まっているだろうし、妊娠22週以前に中絶することもないだろうと予測したためである。

3) 方法：面接の期間は平成8年4月から平成9年1月までである。面接は「十代の望まない妊娠防止対策に関する研究」でデータが得られた産科施設（青森、群馬、東京）と大阪、鹿児島で行った。面接はほとんどが施設内で行なわれ、面接の内容は妊産婦の許可を得てから録音した。面接の時間は一人あたり45分から1時間半に及び、最終的には17名の十代妊婦に面接をすることができた。

結果

1) 十代妊婦の背景

1) 妊婦の平均年齢は18.29才で、年齢の内訳は17才3例、18才6例、19才8例であり、18才と19才で約82%を占めていた。15才、16才の妊婦はいなかった。

2) 妊婦の最終学歴をみると、中学卒業者が2例、高校退学者が8例、高校卒業者は7例であった。妊娠を契機に2名が高校を退学していた。

3) 今回の妊娠が計画的であったかどうかについては、5例の妊婦が子供が欲しいと思って積極的に妊娠したと述べていた。この内1例は前回人工妊娠中絶（以下中絶と略す）をしていた。12例は予定外の妊娠であったと話していた。

4) 面接時の対象者の妊娠週数は妊娠20週から38週におよび、平均妊娠週数は28.7週であった。妊娠週数の分布は、妊娠20週から23週が5例、妊娠24週から27週が2例、妊娠28週から31週と妊娠32週から35週がそれぞれ3例ずつ、そして妊娠36週以降が4例となっていた。

5) 初診時の妊娠週数は妊娠4週から20週におよび、平均妊娠週数は8.9週であった。14例が妊娠11週以内に受診しており、15週までが2例、そして16週以降になった妊婦は月経不順のため、妊娠に気付くのが遅れたと述べていた。

6) 今回の妊娠前に中絶をしたことのある妊婦は5例いた。その内1例は2回中絶を経験していた。

7) 今回面接をした妊婦17例は、妊娠がわかった時点では未婚であったが、面接をした時点では1例を除いて全員が入籍を済ませていた。このケースは相手の年齢が18才になっていないので、入籍をまたなくてはいけないという状況であった。参考までに初回の妊婦健診から入籍までの期間をみると、5例が1週間以内に、4例が1週間から1ヶ月の間に、そして7例が1ヶ月以上経ってから入籍を済ませていた。入籍時の平均妊娠週数は12.3週であった。入籍は生まれてくる子供や保険制度のためであると答えていた。

8) 夫または相手の平均年齢は20.0才で、同じ十代である者が11例と多く、20才代が5例、30才代が1例であった。夫または相手の最終学歴は、中学校卒業者が4例、高校退学者が7例、高校卒業者が6例となっていた。一人の大学生を除いて、ほとんどが会社員、鉄筋工、大工、塗装業等として就業していた。

9) 家族背景では4名の妊婦と8名の夫または相手が離婚家庭または片親の家庭で育っていた。

I I) 面接内容の結果

面接をした妊婦は避妊をせずに、または避妊に失敗して妊娠をしたことになるが、最終的には産む決意をして妊娠を継続していたということである。妊娠中の主観的な経験は妊娠判明から妊娠を継続するに至った経過とその後の妊婦としての生活に分けて把握・理解することができた。

妊娠の継続までの経過は十代妊婦の社会的な背景(社会規範、世間体)を通して、何故妊娠しようと思ったのか、妊娠判明時の気持ち、妊娠の意味と決意、家族との話し合い、そして妊娠中の家族の支援という側面から成り立っていた。そして妊娠中の生活は、妊娠の決意をもとに、十代妊婦がどのような生活の変化を経験し、それをどのように受け止めているのかという側面から記述・理解できると考えた。そこで面接内容の結果は社会の中の十代妊婦、妊娠の継続を決意するまでの経過、そして妊婦としての生活の順に述べていくことにする。

(注) 面接内容の引用で、... は中略を意味する。

1) 社会の中の十代妊婦

日本における社会、文化的な妊娠、出産に関する価値観が十代妊婦の主観的経験に影響を及ぼしていることは言うまでもない。社会の中における十代妊婦の位置付けは十代妊婦自身の“世間”または“世間体”“まわりの目”“子供が子供を産んで”そして“大人と子供”という発言から察することができる。つまり、十代で妊娠することは普通ではなく、十代は子供であるし、親は世間体を気にするということを意味している。時には偏見の目で見られることも有り得る。学校との関係では、妊娠判明時に学生であった者にとっては、妊娠を内密にしておくことが重要であった。そこで、十代妊婦の社会背景にあるものとして、十代妊婦から見た学校と妊娠との関係、中絶後の心理状態、そして子供を産むための条件について記述していく。

(1) 学校と妊娠

この面接調査では5名が過去に中絶を行った経験があり、当時学生であった者はその経験を学生生活との関連から話してくれた。また、2名が妊娠を契機に高校を退学していた。以下に学校と妊娠との関係で、十代妊婦の過去の中絶経験や退学について見ていく。

(a) 前回中絶の理由：学業継続の為

学生の時はいね、学校に行かなくちゃって、自分が今学校に行ってる段階だから、行かなくちゃってという気持ちがすごい強かったって思うけど。一回出てみたら、もうそんな別に、学校止めて、産んで育てても良かったんだけど。

その学校行ってる時は、自分が学校行ってて、勉強してるのが当たり前という条件で、できてしまったから、学校を止めてまで産むっていう、何ていうか、勇気、何か勇気じゃないけど、何かそういうことが思い浮かばなかったから、割り切れなかったというのはあったかな。

けど学校を出てみて、妊娠したら別に、自分にかかってくるものはないし、今勉強しなくちゃとか、そんなないから、自分で選択肢があるから、もっと楽に考えられたけど。勉強とか、学校というのがすごい大きい、もっと（大きな）存在になるんじゃないかなあ、自分の中で。そしたら、おろさなくちゃいけないのかなあって思って。

この妊婦にとって学校というのはとても大きな存在で、やはり学校を続けるには中絶するしかなかったと言っている。この妊婦は妊娠してみて初めて避妊をちゃんとしなくてはいけないと自覚したとも言っていた。今回は予定外であったものの、卒業してからの妊娠だったので気が楽だったし、妊娠とわかった時は、夫と共に大喜びしたと話していた。

(b) 前回中絶の理由：経済的な問題と学校

高校3年生の11月でしょう、で、2ヶ月だったんですよ、もうその時。それでうちの人は、あ、3月に卒業式があって目立たないから大丈夫だねとか言って、ずっと産めって言ってたんですよ。

うん。でも、私はもうほら体育の授業まだ休めないし、なんかほら、その頃またつわりも激しくなると絶対みんなにバレるなあと思って。卒業してからもねえ、しょっちゅう仕事休んだりとかしてたから、経済的にも不安だなあと思って、うん、今回はおろすって。

一緒に暮らした時から産み、うん、子供は欲しいとは言ってたけど、高校、高校生っていうこともあるし、まだね、少し自由な時間も欲しいなあって。卒業したらちょっと自由になるでしょう。

高校で妊娠してずっと生活するんだったら（間）難しいね。うーん（間）、精神的にもまず違うと思うし、うん。絶対卒業して楽になって、もう高校っていう、こう枠を抜けて、で、妊娠した方がすごい気が楽で。

この妊婦はその当時同棲していて、相手は産んでもいいと言っていたのだが、やはり経済的なことや学校で知られたくないと考えて、本人の意志で親には秘密にして中絶したと言っている。この妊婦も自分にとって学校という枠が大きかったことを述べている。さらにこの妊婦は同棲していることが学校に知られたら、親が呼ばれたりとか、停学などの何等かの処分があったのではないかと話していた。

(c) 学校における妊娠の内密性

* 妊娠を契機に退学

この面接調査では妊娠をしたために高校を退学したという妊婦が2名いたが、彼女等も学校で見世物になるのは嫌とか、皆に知られたくないと思って、お腹が大きくなる前に退学したと話していた。

お腹おっきいので注目浴びるのも嫌だし、友達、本当の仲のいい友達しか言わないで学校やめて、何か見世物にされるのが嫌だったから。だからお腹が大きくなる前に辞めたいってはじめから思ってて。

ああ、いづらかった。体育とか今までは出てたけど、ずっと休みっぱなしだったし、みんなに知られたら嫌だとか。回りの友達には言ったんですけど、やっぱ

りひろまっちゃうと嫌だから、黙ってて。

*** 学校の規則と妊娠月数：卒業時期との関係**

もう妊娠がバレた時点で退学、うちの学校すごい厳しいから退学だったんですよ。だから8月に妊娠してて、10ヶ月お腹にいますよね。どうしても3月に卒業するにはお腹が大きくなるじゃないですか。目立たない程度のお腹の大きさだったから、親もいって言ったと思うし、私も産みたいと思います、自分では。もしもっと早かったら、親は絶対反対、私がどうしても産みたいって言っても反対したと思います。

この妊婦の話では、学校が厳しいこともあり、卒業までに妊娠していることが公にならずにすんだので、親も賛成したし、また自分も産もうと思ったということが明らかにされている。前の妊婦も話していたように、学校という枠組みというか、組織は高校生である彼女等にとっては、とても大きな存在であることが面接内容から推察できる。

*** 中絶が予測される理由：学業継続の為**

私がもし17だったら、17だったら高2ですよ。だったらおろしてたと思います。親は高校だけは、社会の流れで、高校ぐらい出てないっていうのがあるじゃないですか。・・・せめて高校ぐらいは出とこうって思うから。もし、16、17だったらおろしてたかなって。それとあと18になって、5月とか6月とか、もしそのくらいに妊娠して中退とかなるくらいだったら、おろしてたかなっていうのは大きい。たまたま妊娠したのが11月ぐらい、だからバレないで卒業できるじゃないですか。だから産みたいっていう、産むっていう決心はありましたね。

これは中絶の経験はないものの、学校に行っていて16、17だったら中絶をしていただろうという妊婦の話である。この妊婦は親が高校卒業を望んでいたのがわかっていたし、自分もそのように思っていたと話している。特にこの妊婦は母子家庭で育った為に、母親に余計な心配をかけたくないという思いもあるようだった。

以上見てきたように学生で妊娠をした場合は学業と妊娠継続の両立が困難な状況にあるため、妊娠の継続を優先すると退学、学業を優先すれば中絶というように選択肢が限定されているという状況が明らかにされている。

(2) 中絶に伴う心理的なもの

十代で妊娠をした場合、学業との関係はもちろんのこと、経済的・精神的な理由の為に中絶をするケースも多々見られる。ここでは主に中絶に伴う心理状態について見ていく。

(a) 前回中絶の理由：経済的・精神的な困難

そうですね。あの時は産みたかったんですけど、彼氏の方がどうしても、その時17だったのかな。どうしてもまだ若いから、うん、おろしてくれって頼まれて。一人で産もうと思っていてもやっぱり絶対無理ってわかったから、親にも言えないし、誰にも言えなくて。ただ、うん、おろして。

この妊婦は前は産みたいという希望はあったのだが、相手が中絶を希望して、一人で育てていくには経済的にも精神的にも無理があることから、最終的には親にも内緒で中絶をしたと話していた。

(b) 中絶後の心理状態

*精神的な打撃

精神的にはそうですね、実感がわかなかったかな。もうおろしたってという実感も、お腹のなかに赤ちゃんがいたってという実感もぜんぜん湧かなくて。ああ、また同じ日々が続いていくのかなあっていう感じ。ただ泣くだけ泣いて、もうあとはもう……。そうですね、自分で水子の、何ていうかな、あそこに1ヶ月に1回お墓参りっていうのかな、行って。

この妊婦は前回の中絶後は毎月1回水子の供養に行っており、約2年程続けたと話していた。今回の妊娠は計画的ではなかったが、今度できたら必ず産もうと思っていたので、とてもうれしかったし、今は妊婦であることを自慢したいと話していた。このように妊婦自身の過去の中絶経験は妊娠を継続する重要な因子にもなっていた。

*安堵感と身体面の不安

おろしたってということで、あの時は、あの時は安心した部分もあったんじゃないかなあ。自分の身体に対しては不安もあったけど、もう出来ないんじゃないかとか。これでもういないんだって、学校に行くんだってという気持ちの方が大きかったかなあ。まあおろすことがもうまわりで頻繁に起きてるから、そんなに自分の中で起こって、たとえ自分がどんなにショックだったとしても、だけど皆おろしてるなあっていうふうなので、割り切れるようになってたから。誰か1週間ご飯が食べれなくなるとか、そんなふうには落ち込んだりとかはしなかったけど。次の次の日くらいから学校にも行ったし。

この妊婦も中絶後は水子供養をしていたが、中絶時は学生であった為に、学校に行くという気持ちが強かったことを述べている。またまわりでの中絶の頻繁性や中絶の身体に及ぼす影響も指摘している。

(3) 子供を産む為の条件：世間または世間体、まわりの目、偏見

友達とか、結構びっくりしてるんだけど、早いなあとか言うけど、うん、別に。親がやっぱり、親の方が世間的にしてるんじゃないのかなあ。早くおばあちゃんになりたくないとか、あそこの子供は十代で子供を産むんだってみたいに、まわりから見られるのが嫌なだけで、本人はぜんぜん。

お父さんは公務員なんで、何かいろいろ噂みたいなのがふれまわって、何かこうだって言われて、世間体みたいなのを気にしちゃって、おろせて。

子供を産む為の条件は、上記のような親が世間または世間体を気にする態度とか、妊婦自身が日常生活のなかで感じたこととして述べられおり、それらは妊婦の年齢的な要素、婚姻状況、そして妊娠と結婚との順番に関連していた。

(a) 妊婦の年齢的な要素

20才という年齢は一応大人と子供を区別する一つの要因であるが、十代で妊娠して子供を産む場合にもこの年齢的な要素が大きく影響してくる。十代妊婦が“結構、子供が子供を産むなどか言われて”と言っているように、未成年で子供を産むことに対する社会的な規範が示されている。

いやあ、何歳ぐらいかしらねとか、若いからどうせおろすんじゃないのとか、そういうふうな感じで言われているのがあって、何故そういう目でしかとらえられないのかなあと思って。

全部自分達でお金をためてやっていこうって、そう決めてやっていったんです。そしたら、あの向こうの病院の先生が、どうせ親に出してもらうんだろうとか、そういう言い方ばかりして、で妊娠の経過もちゃんと教えてくれないし、何も教えてくれないんです。

この妊婦の経験では、一般的に親がかりになるのだろうとか、おろすのではないかというような感じで見られる場合もあると述べている。中には“人の目が気になる”と言う妊婦もいた。これは妊婦の思いだけかもしれないが、十代妊婦が社会的にどう受け止められているかを示しているように思われる。

しかし、妊婦自身の中では十代で子供を産むことは何とも思っていないとか、ただ子供を産む時期が早くなっただけだから、年齢は気にしないし、妊婦であることに変わりはないという発言がみられた。一応社会における十代妊婦の立場は意識しながらも、それを自分のなかで昇華しようとする態度が伺えた。

子供が子供をっていう話は、いくら年がたってても考えが子供だったら子供だし。．．． とにかく子供が子供を産んでとか、何かそんな差別的な言い方は止めて欲しいから。．．． 大人だからどうじゃなくて、子供だからどうするとか、そういうんじゃないで、妊婦は妊婦（口調を強めて）、ね。

まだ若いのっていう感じで言われるのとかあったり。．．． いや、別にそれは若く、若くても年いってても、それは一緒だと思うから、そういうのは気にしてないですけども。

見た目はまだこう子供だから。うーん、だからやっぱバスとか乗ってたら、お腹は大きいんだけど顔は子供だから、何か釣り合わないなとか思っているかもなとか思うんだけど。別に自分はもう子供がいるんだぞって顔して、もう気にはしないで。．．． 何か別にまわりがどう思うといいもんとか思って、若いでしょうとか言っとけばいいやとか思うから。なんかやっぱり言われることは言われるけど、別にそんなに気にはしない。

(b) 婚姻状況

面接した十代妊婦は未婚で妊娠したものの、面接の時点では一人を除いて入籍を済ませていた。これは子供の戸籍や医療保険と関連しており、子供は結婚した両親のもとに生まれるのが普通だし、妊娠して子供を産むとなれば、結婚するのが当たり前という考えに基づいていた。

やっぱり2人の子供だし、子供ができたから。．．． やっぱり、でもね、子供のことを考えると、このままずっと何年先にも籍ね、ずっと入れないよりは生まれる前に籍入れた方が良くかなと思って。

子供ができたから、うん。．．． もうその人と結婚する、しなくちゃいけないんじゃないけど、するのが普通かなあみたいな感じで、うん。成り行きなのかな、かもしれないですね。

やっぱりそういうのは、けじめは、けじめっていうのは、何て言うんかな。もうそういうのは今当たり前って思ってるんかな。うーん、入籍は、きっかけは子供ができたっていうのがきっかけで、入籍した、うん。．．． 入籍するのにそんな何も別に考えてなかった。

(c) 妊娠と結婚の順番

十代妊婦は妊娠と結婚の順番が異なることに関しても、十分意識しており、“できちゃった結婚”とか、友人の“結婚もしてないのに、子供を産むの？”という言葉で表現されていた。そして、やはり結婚が先が良かったとか、本当は先に結婚して子供を産むはずだったとか述べていた。しかし、自分の内面ではそれは気にしないという気持ちも述べられていた。

うーん、やっぱり先に入籍したかったですね。できちゃった結婚っていうのは、ちょっと。できたから結婚したんでしょうみたいに、こう言われる、言われそうな感じですよ。それでやっぱり入籍が先が良かったねえっては、主人と言ってたんだけど、先にできちゃったし、しょうがないし。

結婚もしてないのに子供ができちゃって、まわりからふしだらみたいに思われるのかなあ。．．． ほんとはもうすぐに結婚するはずだったんですよ。ちゃんと籍入れてから子供を産むはずだったんですよ。ちょっと順番がずれちゃった。

でもまわりからみると子供が出来たから結婚したって思われるのはいやだったけど。．．． 絶対大人の人はずみできて、はずみで結婚して別れるのが当たり前みたいな感じに、絶対ほら、おばさんとか言うのかなって考えると、うん、やっぱり順番がちがうとおかしいって思われるかなって考えたりとかもするし。

別に結婚が先でも、子供が先でも自分はもうどっちでもいいなと思っていたから。子供も欲しかったし、結婚もしたかったし。だからもう子供が先でも結婚が先でも自分は良かったから。．．． 別に結婚前に子供ができたからとか、そんな思わなかった。できちゃった結婚だねとか言われても、別にできたから結婚したんじゃないもんとか言って。できなくても結婚してたもんとか言って、そんな感じで言うてはいるんだけど。

2) 妊娠の継続を決意するまでの経過

ここでは妊娠判明から妊娠継続について家族の同意、支援が得られるまでの一連の経過について記述する。これには妊娠の動機、妊娠判明時の気持ち、妊娠の意味、妊娠の決意、家族との話

し合い、そして妊娠中、家族が妊婦に対してどのような支援を行っているのかが含まれる。

(1) 妊娠の動機

何故妊娠したのか、または妊娠しようと思ったのかという妊娠の動機は妊娠の計画性と避妊の問題という側面から把握することができる。積極的に妊娠をしようと思った者を除いては、予定外の妊娠ではあったものの、妊娠前の妊娠の可能性に対する予測では若干の違いがみられた。それは避妊していたのに妊娠した者、避妊しなくても妊娠はしないだろうと楽観的に考えていた者、そして避妊しなくて妊娠したらそれでもいいと考えていた者に分けられた。また妊娠判明時の気持ちは否定的、複雑、そして肯定的という見方に分類することができた。

(a) 妊娠の計画性

* まったくの予定外妊娠：避妊の失敗

これは避妊法としてコンドームを使っていたのにもかかわらず妊娠したケースで、妊娠判明時の気持ちは、嬉しい半分複雑と述べていた。

* 楽観的な見方

避妊はしなくても妊娠はしないだろうと思っていた者のなかには、正確な避妊の知識をもっていなかったり、また避妊は男性側の問題であるとか、相手にまかせていたというような態度が見られた。

ああ、いつも避妊はしなかったです。私はまだ高校行ってたから、で、まだ1年つきあってなかったから、ぜんぜん考えてなくて、そしたらたまたま危なかったみたいだから、調べたらやっぱり妊娠していた。．．．それでやっぱりつきあって、ぜんぜん今は妊娠とかしなくて、だから平気だろうって安心してた。

はじめはしてたんですけど、何かしなくなった。それは向こうに任せてたっていうか。いや何かつくと変、何ていうの変だから。．．．でも大丈夫かなとか思って。

それは男性側の問題だと思う、どっちかって言ったら。こっちが頼んでもそんなつけてるふりしてははずすことも出来るし。もっと皆出来ないようになって言ってると思うけど、相手の人に。でも相手がちゃんとそれを聞いてくれないからできてしまうとかなるんじゃないかな。だからそれは難しい。だから前に妊娠した時も、できて仕方が無いような状態だったから、それはもっと自分達で考えなくちゃっていうのは、もう出来てしまってから思うことで、まさか自分に出来る訳ないわっていうのが先にあったから。

* 若干の予測と期待感

これに属する妊婦は避妊をしなければ妊娠するかもしれないと予測はしているものの、積極的に妊娠したいとは考えていないが、避妊もしていない。事の成り行きに任せて妊娠したらその時に考えればいいし、子供を産む場合もあるかもしれないと予測していた。

あ、その頃ちゃんと私が産みたいっていうんなら産んでもいいよって言ってたんですよ。

主人が子供が欲しい、子供が欲しいとか言って、ちゃんと避妊しなかったから。できてもいいかもなとか思っていたんだけど。

*計画的妊娠

17名の十代妊婦の内、5名の妊婦が積極的に子供が欲しいと思って妊娠をしたと述べていた。計画的妊娠の背景には不安定な家族関係、自分の生活を変えたい願望、学校がつまらないなどが関係していた。

自分の家庭みたいな欲しかったんですよ。何かあたしも家族とはあんまりかみ合ってなかったんですよ。だから、うん、もめてたりね。だから自分の好きな人と家庭をつくりたいなあっていうのはあったから。

あまり意見もってないんですけど、子供が欲しいよねって言って、計画的だったんですよ。出来ちゃったとかじゃなくて。(これには夫が施設で暮らしたことがあるという生育歴が影響していた)

結婚願望はすごいありましたね。どうして、何故って言われたら、まあ子供が欲しいから。子供欲しいし、仕事もしたくないし、それぐらいかな。落ち着いたっていうのがあって、その場から抜けたっていうのがあったから。あと、そのまま地元いたら、自分がどこまでいくかラインをおけなかった。それが恐くて、誰かにもう助けて、助けてっておかしいけど、もらってもらわなくちゃって思って。今の主人と出会って、この人とだったら頑張っていけるんじゃないかって思って。やっていけると思ったから、全部性格も何もかも変えて、主人と会ったんです。(シンナー遊びのグループに属していた妊婦の話)

2人とも結婚するつもりでつくったっていうか。私が高校卒業してからっていう話もあったんですけど、あんま高校つまらなくて、うん。何か2人、気持ち焦ってて。(その焦ったというのが何が?) いやもう子供を欲しいって2人で言ってて... あ、もう欲しいって思っちゃってたから、うん排卵日とかちゃんと計算してっていうか。それで避妊はしないで。

(2) 妊娠判明時の気持ち

妊娠とわかった時の気持ちはさまざまであったが、大まかには否定的な感情、アンビバレントな感情、そして肯定的な感情を示していた。一人だけ何も考えなかったという妊婦がいた。また妊婦の中には親にどう言おうかと心配した者もいた。

(a) 否定的な感情

だから信じ、納得できなかつたし、自分自身もいや嘘でしょう、本当なのって感じがあったから、どうしようって。できてたら産むっていうのはあったけど、いざ妊娠してますよって、これがどうのこうのですよって説明されたら、ああ、本当にいたの、どうしようかなって感じだったけど。でもやっぱり産もう産みたくないなあっていうのが最初からあったから。

そうですね、相手はずっと欲しい欲しいって言ってたんですけど、私の方はま

だ仕事もいろいろ、したい事もいろいろあったんで、子供はつくる時期じゃないってずっと言っていたんですね。そしてその間にできちゃったから、あたし迷ったんですけど、どうしようかなと思って。でもねえ、初めてだったし、おろすっていうのはできないなあって思って。

特に予定外の妊娠である場合、迷い、とまどいの感情を抱きやすい。妊娠のタイミングとも関係して、この妊婦はまわりの反対とか、経済的な問題とかもなく、結局は自分のしたいことを諦めて妊娠を継続することにしたと述べていた。

(b) アンビバレントな感情

何人かの妊婦は嬉しいけど不安とか、驚いたけど嬉しいなどの相反する感情を抱いていた。

わかったときは、うん、うれしい半分不安っていうのか。(その不安っていうのはどこから?) 不安っていうのはそういう、うん、もし産んだとしても私達の年齢が足りないから、籍入れられないし、子供が将来それを引きずっていくことだから。戸籍上のこととか、そういうのがあったから。

この妊婦は未婚のまま子供を産むことに対して不安を抱いていた。やはり戸籍上の問題とかもあり、子供は結婚した両親のもとに生まれるべきという社会的な規範があることを反映している。

他の妊婦では、妊娠は驚きであったが、子供を産む事は自然のことであるし、うれしく思ったと話していた。また妊娠はうれしかったが、経済的な面で不安だったと述べた妊婦もいた。

できたの、みたいな、そんな感じだったんですけど。... 計画的ではないけど、うん、自然、ああ、できちゃったあ。避妊はしなかったです。しなくて急に、急にこう生理がなかったから、あれ、いつもあったのにないっていう感じ。で病院に行って調べたら、できてたっていう感じだったから、うん。

私はやっぱり生理が遅れてるっていうんで、もしかしたらっっていうのがあったから、それで病院行ったらやっぱり妊娠してて。その時すごいうれしいのと不安なのがあって。で、向こうも仕事はじめたばかりだから、たぶん初めはおろすかなっていうのがあったけど、私がおろしたくなかったんですよ、どうしても。で、やっぱりおろすこととかいうの、親にはすごい言いづらいじゃないですか。

(c) 肯定的な感情

約半数程の妊婦はうれしかったとか、喜んだなどの肯定的な感情を抱いていた。その中で印象的だったのは、自分の生殖機能についてのべた妊婦がいたことである。

あっ、できてって。自分でもちゃんと、あっ自分の身体でもちゃんと出来るんだみたいなの、そんな感じですかね。今不妊とかっていう話題も結構あるから、ああ、自分は不妊じゃなかったんだあって、そっちの方しか考えなかったですね。ああ、健康な身体で良かったあって感じで、お母さんありがとうみたいなの。女でよかったっていう思いでしたね。

(3) 妊娠の意味と妊娠継続との関連

十代で妊娠することはどのような意味があるのかについてみてみた。これは妊娠を継続する為の重要な要因でもあり、この二つは密接に関係していた。前に述べたように積極的にまたは計画的に妊娠しようとした者は、それまでの生活をかえたいなどの願望から、妊娠を手段として利用している様子が伺えた。予定外の妊娠については、妊娠した結果、その妊娠に何等かの意味付けを行って、それが妊娠を継続させる要因になっていた。それは中絶を避ける、子供の生命の大切さ、妊娠は自然の出来事という意味付けであった。

(a) 手段としての妊娠

うん、赤ちゃんが欲しかったし、うん、もうあんなつまらない学校に行ってるんだったら、好きな事をして、したほうがいいなって思って。．．．子供を育てるのは大変だっていうのはわかってるし、別に何歳になってもそれは一緒だし、別に覚悟を決めて、早くてもいいやって。

この妊婦は学校がつまらないこともあって、計画的に妊娠してみずから母親になることを選択しており、その決意をかためている様子が伺える。学生で妊娠を継続することは難しいが、退学して、結婚して妊娠を継続すれば、社会的には体裁が整うということであろうか。この妊婦はさらに妊娠の計画性と責任について以下のように述べている。

何か欲しくないのにできちゃったとか言って、おろすのはやめて欲しい。ちゃんと計画して、つくるんならつくって、で最後まで責任をもって産むって感じで、してほしい。

別の妊婦は面接時には話さなかったのだが、産後の電話連絡では子供が欲しいという気持ちがあったことの理由を話してくれた。それは子供を持てば、落ち着くんじゃないかと思ったこと。育児におわれて、遊ばなくなるし、まともになると思っていて。悪い友達とも遊ばなくなるし、友達と遊ぶのに疲れてきたし、生活のパターンを変えたかった。最後に今は育児は大変だけど楽しいし、子供も表情がでてくるし、満足していると話していた。

(b) 妊娠への意味付け

予定外の妊娠であった者は、妊娠後に妊娠を継続するにあたって、社会背景のところで述べたような年齢と妊娠、婚姻状況、妊娠と結婚の順番などを考慮しなければならないが、さらに重要なことは中絶の頻繁性にもとづく要因が、妊娠の継続に関連していたことである。

* 中絶の回避

特に今回の妊娠前に中絶の経験のある妊婦は中絶したくないという思いが強いようであった。また中絶を経験していない妊婦でも、母親、姉妹、友人などの中絶経験を耳にしている為に、中絶による心理的な身体への影響を心配していた。

うん、でも、今度出来たら産もう産もうって思ってたから、つけないで。やっぱりこのせいかな、なかなかできなかつたね。だから今回できたのはすごうれしかった、うん。

両方の親に相談した時に、うちの母も向こうのお母さんも一度流産してて、そ

の話聞いてて、じゃそういう経験はさせたくないからって、その経験した気持ちっていうのを聞いたりして、やっぱりおろすのは嫌だなあって思ったから。それで決心したんです。

その前からお母さんは中絶したことがあるからって言って。お母さんも中絶しておろしたら身体がおかしくなったって、後々に聞かされて。ほんで、あ、そうかと思って、できたことを知らせたら、また同じことを言われて。

うん、義理の父は中絶して欲しいって言ったんだけど、母の方があの中絶を止めた方がいいって言ってくれて。．．．中絶すれば、今度母体の方が危険でしょうって母が言ってくれて、それで父を説得したみたいな。それで産んでもいいよって言われたんです。

うん、早いなあって思ったけど、おろしたらおろしたで、またつらい日々があたしを待ってるだろうなと思って。うん、これだけは絶対許されることじゃないから、うん。絶対産もうって感じで、うん、まわりの友達もおろしてる子とかいるから、やっぱりつらいから、それも。．．．もし自分が中絶したら、立ち直れないみたいな。もし好きじゃない人の赤ちゃんができたら、もう自分が嫌でたまんない。自分をののしる。多分立ち上がれない感じですね。毎日泣いて暮らすような、そんな感じかなあ。誰かが助けてくれないと立ち直れないっていう形ですね。（中絶を仮定した場合の話）

*子供の生命尊重

妊婦は自分のお腹のなかで胎児が育っていることを思うと、子供の生命は大切だからと、妊娠の継続を決意している。これは中絶の頻繁性や仏教や儒教の教えにもとづく“子供は授かりもの”という価値観とも関連していた。

うん、お金もいるし、それはわかっているけど、子供の方が。そのお金がなくておろすっていうのは、何ていうのかな。その、せっかく、ねえ、かけがえのない命ができたのに、そういうなんでおろすのは2人とも絶対に、どんなに苦しくても。

やっぱ授かった子だから、あんまりおろしてほしくないな。

赤ちゃん可愛いから（笑）。可愛い、可愛い。やっぱり自分の中で妊娠してる時って一緒に彼といっても、一番自分が赤ちゃんいるんだなって、実感あるじゃないですか。そういうんで、こうやって何かお腹とか見て、ああ、いるんだなとか思うと、どうしてもおろせなかった、今まで考えたことなかったから。もし、冗談でもできたんじゃないとか言われても、うん、多分おろすよとか言ってたけど、本当に今、実際に、ああ、ここにいるんだとか思ったら、おろせなかった。

この妊婦も妊娠は予定外であったが、妊娠していることを身体で実感するのは女性である自分だから、赤ちゃんの存在を思うと、おろせなかったと述べている。これは母性性というか、胎児への愛着心を表わしていると思われる。またこの妊婦は一度中絶を予定していたが、相手の先輩から“中絶して後悔するよりは、産んで後悔したほうが良い”と言われ、産む決意をしたと話していた。

他の妊婦でも、超音波で胎児をみたり、その写真をもらったり、また胎動を感じるようになると、なお一層“赤ちゃんが可愛い”という思いは強くなるようであった。また“好きな人の子供だから”という言葉からは、子供は相手と自分の関係を証明するもの、またはきずなを深めるものとして捉えられているようであった。

子供自体好きだから。最初保母さんになりたかったんですよ。だから子供自体は好きだったから。何て言うの、お腹にいるモニター見た時すごく嬉しかったんですよ。動いていて。割とこんなに小さかったんだけど。それでお腹にいるんだとか思ったりして。何かあんまりうまく言えないんだけど。

いや、うん、今つきあってる人のこと好きだし、好きじゃなきゃやっぱりHしないわけだから。

だって好きな人の子供ができて、やっぱりそうおろせないですよ。まわりがいくら反対をしても。

*妊娠は自然の出来事

特に同棲をしていたものや将来結婚の予定があったものは、妊娠をしてもいいというような気持ちで、妊娠を自然の成り行きとして捉えていた。

せっかくできたし、これからが大変。これから2人でずっとやっていく時に、軌道に乗った時に赤ちゃんとかできて一人かけちゃうと大変だから。それだったら早いうちに産んどいた方がいいかな。

この妊婦は理容師で夫と共に将来自分達の理髪店をもつ計画があるので、できたら次の子供も早く欲しいと述べていた。

(4) 妊娠継続の決意：自己決定の重要性と決意の表明

十代妊婦は最初に自分自身で妊娠の継続を決意して、それから家族に相談している。ここでは自己決定の重要性と妊娠継続の決意がどのように表明されているかについて述べる。

うーん、いくら子供でも決めるのは自分達だから、それだけはほんとに。うーん、何かね、何か産むのは貴方がたじゃないですよって。考えてどうするかというのは私達ですよって。

うん、だから自分達の親にもそれはもしおろすとなっても産むとなっても、これは私達2人で決めた結論だから、それでも文句は言わないでねって、言ってたし。ねえやっぱりね、自分達で決めなきゃいけないことだから、それは。誰かにおろせて言われてから、はい、じゃおろしますっていうそんな簡単な問題じゃないから、うん。とにかくそういう問題は自分達の問題だから。

まず、産むか産まないかの決定については、この妊婦は自分でというか、相手と二人で産むか産まないかを決定することの重要さを話していると思われる。このケースは確かに経済的に困っていて、“何とかなる”という考えは甘かったと、面接の時点では話していたが、産むか産まないかの決定に関しては、それは自分達の問題だから自分達で決めたいという意志表示をしていた。

ねえ、やっぱ年は関係ないじゃないですか、そういうの。やっていこうって気持ちは、いくらそれが大人になろうが子供であろうが、それは変わらないから。

これは面接に同伴した夫の発言であるが、妊娠して子供を育てていこうという気持ちに年齢的なものは関係ないと話している。他にも同様のことを話した妊婦がいた。子育てに関して経済的なこととか考慮すべきことはあるが、この気持ちは大事にしていきたいものである。

もう、もう2人で結婚するって意志かたかったから、もし反対されても、反対されても何か関係ないっていうか、別に親にいうのどうしようとか、それは思わなかった。

もう家出する覚悟っていう、そういうのもありましたね。もしおろせて言われて強制的みたいになっちゃたら、もう出て行くしかないみたいな。絶対おろしたくなかった。

もうあれですよ、あれですよ、おろさない。向こうは絶対おろしてくれって言って、私は絶対おろさないって言ったんですよ。だから私が別れてでもお母さんと一緒に育ててやっていくって言ったんですよ。

これら3人の妊婦の言葉からは、親や相手の反対があつとしても彼女等の妊娠継続への思いがいかに強かったかが推察できる。

あの産むとしたらもう自分で決めたら頑張って、育てて、それだけですわね。

頑張れよ、負けるなよって感じですね。決めた以上はやれよって。まあそんなもんかな。

子供を育てるのは大変だっていうのはわかってるし、別に何歳になってもそれは一緒だし、別に覚悟決めて、はやくてもいいやって。

うーん、自分が産んで、ちゃんと生活して、ある程度育ててみると、親も納得するんじゃないかな。

妊娠の継続を決意したら、やはりそれなりに行動でその決意を示さなければいけないが、これらの妊婦はちゃんと育児をしていくことの重要性も述べているように思われる。その決意を行動で示すにあたっては、頑張るという言葉が使われており、またまわりの家族や友人も頑張るといふ励ましの言葉をかけていた。

(5) 家族との話し合い

妊婦は自分自身で妊娠の継続を決意したものの、やはり家族の同意を得なければいけない。また妊娠を継続するにあたって入籍という手続をとる場合、十代妊婦は親の承諾が必要なために家族との話し合いは避けられないものであった。妊娠を家族に告げた時の反応は賛成、しかたがない、反対の3つのパターンで説明できた。ここでは家族の妊娠に対する反応と妊娠の継続にどのように同意したのかについてみていく。

(a) 妊娠に対する家族の反応

* 妊娠の継続に賛成

約半数の妊婦が妊娠前に同棲をしていた。3例の妊婦の家族はその事を承知しており、妊娠という事態に驚かず、また妊婦の過去の中絶経験も考慮して、子供を産むことに賛成していた。妊婦が仕事をしており経済的に困窮していなければ、妊娠の継続は問題とはならないようであった。

えと、同棲してたから、お母さんに言った時は、うん、同棲してて胃の調子が悪いとできてるってことだから、そんなに驚かなかったけど、お父さんはちょっとびっくりしたみたい。で、あっちの両親は、うん、喜んでみたい。

うん、もう一緒に住んでたから結婚きまってて。．．．向こうのお父さんは喜んでた、すごい。．．．初孫だして言って。やっぱ嬉しいんじゃないかな。

* しかたがない：事実容認

このしかたがないという家族の受け止め方は、子供ができたことは事実だし、子供の命の大切さや中絶を避けることを考えれば、子供を産むしかないというような考えに基づいていた。5名の妊婦のどちらかまたは両方の家族がこのような反応を示していた。

うちの両親は、できちゃったからには産めばみたいな感じで、相手も相手の親もできちゃったからには仕様がなみたいな感じ。

旦那さんの実家にまず電話して、で、すんなり、うーん。じゃいいよって、産んじまってっていう感じで、言ってくれて。で今度はうちの親に喋ることにして、うちの親も、まあしかたがないねえっていうことで、うん、産んでいいよってことで、向こうの両親と会ってくれて。

そんな頭ごなしに反対はされなくて、うん、もうしょうがないから、頑張れって感じで。

もう、もう仕方ないからみたいな感じだったんだけど。でそんなに言われるの当たり前かなって思ってたから。もうおろせて言われたくないなと思って行ったんだけど、おろせとは言わなかったんだけど、一日考えさせて下さいと言われて。

子供ができたから籍入れるって、うん、で、その時に言って。それでもずっと一緒に暮らしてきたからしかたない。また、その日は認めてくれた、うん。

お母さんはもうしょうがないなあとか思ったみたいですけど。

* 妊娠の継続に反対

約半数の家族が妊娠の継続に反対し、最初の中絶することをすすめていた。家族の反対の理由は子供を産む条件で述べた要因に加えて、妊婦の年齢、経済力または生活力、そして子育ての責任に基づくものであった。

まだ未成年者っていうか、まだ20才になってないし。まだ何と言うんだろう、

こう落ち着いてから、そんな1年も経たないうちだったから。．．．子供ができてなったから、何て言うんだろう、うちの親もやっぱり責任がとれないんじゃないのかなとか、いろいろ考えたみたいで。．．．だから心変わりというか、自分にちゃんと責任をもって子供を育てていけるんだったらいいけど、でも中途半端な気持ちだったらもうやめた方がいいと、そんな感じだったから。

どうしようかと思って言ったんですよ、親にうちの母に。．．．お母さんは産んでもいいって。お父さんはちゃんと責任とれて。それからまず一緒に住むことを考えて、彼が仕事について何ヶ月か働いて、お金ためて。それから一緒に住むようになった。

向こうのお父さんははじめはおろせて言ったみたいなんですけど、でも彼が後のことを考えてるって、何か反抗したみたい。産ませるって言ったらしいですけど。（そのおろせて言われた理由は？）多分あの産めないって思うから。育てていくことができないと思うから、だから言ったと思うんですけど。

うちの人は、まだ若いまだ若いっていうのと、まあ経済的に不安定っていうのと。子供産んでいつまたうまくいなくなって別れることもあるから、もう少し考えた方がいいんじゃないかなって言ってたけど。

まず、あたしが若いこと、だと思っただけど、何が反対かっていうのは私には直接言わない。ただ若いだけ、何ができるんだって、ずっとあったし。

特に経済的な問題は以下の例に見られるように、十代妊婦自身も自覚していた。

やっぱり、お金面で、生活面でお金が一番大切じゃないですか。私はもう仕事できないし、2人でやっていくっていうのはできるけど、赤ちゃんができるとそれなりに大変じゃないですか。それは絶対無理だっていうんで、すごいめっちゃめっちゃ喧嘩しましたね。（相手と金銭面のことで喧嘩した話）

あとはもう何も無いけど、金銭面が一番。まあしょうがないとか言って、しょうがないから助けてもらって返済していく。

(b) 家族の対応と同意

妊婦の家族は妊娠の事実を伝えられた後、最終的には妊娠の継続に同意を示していた。特に妊娠の継続に反対であった家族はどのようにして同意したのだろうか、その経過を妊婦の話からみていく。中には妊婦の話をちゃんと聞いてくれて、その対応策を妊婦と一緒に考えた家族も見られた。一人の妊婦は相手との両親との話し合いにまったく参加しておらず、相手が家族を説得していた。

それでまた1日経ってから、頭下げに行ったら、もうおろすのはかわいそうだから止めなさいって言われて、おろすのはこっちも考えてなかったからと一応話をしたんだけど。仕方ないからもう子供を無事産むまではいろいろ手伝いをして、させてもらうからと向こうの親が言ってきて、だからもういいのかなと思って。

お母さんにいちばん初めに言った時は黙っていました。すごい、お母さんなんかどうしていいかわかんなかったらしくて、ずっと黙ってて。それからどうするのか聞いてきて、私は産みたいけど向こうはおろしてって言うてるって言ったら、で、お母さんがどうしても私が産みたいんなら、お母さんは協力してあげるからって言って。

はじめはびっくりしてたみたいだけど、冷静に話してくれて、で自分の経験も言ってくれて、で産むんだったら、これからどういうことをしていかなきゃいけないとか、そういうことをちゃんと話してくれて、協力してくれるっていうことになったんです。

向こうの両親が反対してたんです、わたしとの結婚に。それに反対してたんですけど、旦那さんが話し合っ、結婚できるようになって、それで産めるように。

家族が子供を産むことに同意した後はひとりを除いて入籍をすませていた。入籍にあたっては、妊婦自身が親の著名が必要なことや入籍することで出産費用が出産後に返済されるなどを知らない場合もあった。

(6) 妊娠中の家族の支援

最終的に妊娠の継続に賛成した家族は、妊婦に対して最大の支援をおこなっていた。特に妊婦側の家族の経済的、心理的な援助は大きく、家族は重要な支えになっていた。また妊婦とその母親との関係は妊娠前より親密なものとなり、妊婦は母親にわからないことは何でも聞いて、その助言に従っていた。しかし、夫の家族と結婚後しばらく同居していた妊婦は、夫の母親との人間関係がうまくいかずに、後で別居していた。

(a) 経済的な援助

妊婦の家族はいろいろな面で経済的な援助を行っていた。例えば、結婚して新しく生活を始めるにあたり、家財道具を買ったり、アパートを借りる敷金や保証金を立て替えたりしていた。面接をした時には少しずつ返済しているという妊婦もいた。また家賃として夫の給料の半分を支払っている妊婦は、とても生活費がたりないので、両方の家族が食事面で面倒を見ることが多いと述べていた。この妊婦は分娩費の給付制度を利用する手続きをしていた。また夫が大学生であった妊婦は妊娠後に親からの仕送りが多少増えたと話していた。

妊婦にとっては出産費用の工面も心配であり、ある妊婦は出産費用の分割払いを認めてくれたらいいのにと言っていた。その妊婦は公のお金を借りることにしたと話していた。中には産後に返ってくるものだから、出産費用は親に出してもらおうようにしているという妊婦もいた。

(b) 心理的な援助

妊婦にとって最も身近な存在は妊婦自身の母親であった。妊婦は母親を妊娠、出産を経験した女性として見ており、その経験に世代的な差はあるものの、わからないことはまず母親に聞くという態度が見られた。母親は一般的に言われている妊娠中の生活についてアドバイスをしていた。例えば冷やさないようにとか、食事に気をつけてとか、よく動くようにとかである。また母親のすすめでオムツを縫っているという妊婦も2名程いて、一人の妊婦は“それは母親の愛情だか

ら”と話していた。また母親に頼んで妊婦健診に同伴してもらおうという妊婦もいた。全般的に妊婦の母親はよき相談相手、話相手であるが、妊娠、出産を経験している姉妹がいる場合はその姉妹に相談している妊婦もいた。ある妊婦は自分の母親について次のように述べていた。

お母さんはお母さんのまんまであまり変わってないんだけど、やっぱりお母さんは頼りになりますよね。買い物とか行っても赤ちゃんのためにお魚、小魚とかヨーグルトとか、お腹に言いものを買ってくれたりして、お母さんってこういう人なんだなって。考えているなあとか。自分が産むことになってお母さんってこういうことをしなくちゃいけないんだとか、そういうのを実感しますね。

この妊婦は母子家庭で育った為に、母親がとても頼りであり、もし自分の母親が子供を産むことに反対したら、妊娠を継続することはなかつたらうと言っていた。

3) 妊婦としての生活

入籍をすませると社会的には年齢が十代であること以外は、十代妊婦の生活は一般の妊婦とあまり変わらないものとなる。妊婦として日常生活で気をつけることなど母親や医療従事者から話を聞いており、それに従うように自分の生活を変えていた。例えば食生活に注意して、野菜やカルシウム類をとるようにしているとか、煙草を吸っていた妊婦は一日の喫煙本数をへらしたり、禁煙をしていた。また雑誌や本類などからも情報を得ていた。仕事をしていた者は立ち仕事で身体を冷やすといけないからとか、重い物を運んだりする仕事のために妊娠の初期に辞職していた。

またすべての妊婦が妊娠20週以降であったために、胎動を感じており、これは妊婦の母親になる意識を芽生えさせる契機になっていた。妊婦は胎動を感じるまではお腹の中で胎児がちゃんと生きているのか心配であったが、胎動を感じるようになってからは、胎児の存在を確認できるので安心するとはなしていた。多くの妊婦は胎児に話しかけたりしていたが、ただ一人の妊婦は胎動が気持ちわるいと言ひ、特に話しかけたりもしないと言っていた。

また夫も胎動を契機に父親になる自覚を持ち始めているようであった。夫の妊娠や分娩にのぞむ態度は、積極的に母親学級に参加したり、分娩に立ち会いたいという意欲を持つ夫から、まったく関心を示さない夫などさまざまであった。

妊婦は夫と共に生まれてくる子供の名前を考えたり、顔を想像したりすることが楽しみだと話していた。この事に関連して将来の育児については、3才まではそばについてあげたいとか、子供は普通に育ててくれればとか、また自分が高校を卒業してないので、子供には学校に行つて欲しいなど、妊婦の希望や期待が述べられていた。また将来どうしても仕事をしたいという強い希望をもつ妊婦は少なかった。中には母親業に専念するという妊婦もいた。

面接をした時点での妊婦の不安は分娩に関するものがほとんどであった。例えばちゃんと出産できるだろうかとか、陣痛に耐えられるだろうかという内容であった。

以上の結果は、十代妊婦の生活として一般的な妊婦の生活と大差がないと思われる内容である。しかし十代妊婦を妊婦と十代という二つの側面からとらえると、妊婦としての側面は他の妊婦と変わらないようにみえても、十代としての側面では異なる点があるように思われた。それは妊婦自身の“家にいると暇だし”“友達にも会えなくて寂しい”“遊びにいけない”または“友達がうらやましい”という言葉から察することができるように、妊婦であることの否定的な面が強調されていた。そこで十代妊婦が妊婦としての生活をどのように受け止めているのかについて、体重増加と体形の変化についても含めながら、以下に述べていく。

(1) 十代としての自由の束縛：妊娠中の規制との関係

十代妊婦は入籍をすませた後、晴れて社会に受け入れられる妊婦となったが、妊婦としての生活自体は家にいることが多く、結果的に暇で退屈という発言がみられた。また妊婦として日常生活面で規制されることがたくさんあるので、それまでは十代として普通にできていたことができなくなり、つらいとか、妊婦だからしかたがないというように受け止めていた。また、まわりの人々の妊婦への気遣いに対しては、それをうれしい、有り難いと思う反面、あまり気を遣って欲しくないとか、甘やかされていると感じている妊婦もいた。

やっぱり食べ物の制限があるとか、あの遠く、遠出とかあんまりできないこと。激しい運動とかそういうのができないこととか。

お腹に赤ちゃんがいたらどこにも行けない。遊園地とか旅行とか、ましてや今年の夏、海でしょう。海にも行けないし、それがつらいですね。

いやですね。何かおしゃれしたい時なのに．．．しかたないですね。

いやなことは、18才の子がやってるようなことができないこと、うん。みんなでどっかに遊びに行ったりとか夜遊びとかできないじゃないですか。それは覚悟のうで産むって決めたけど、やっぱり実際みんなが電話とかして会ったりとかして、話とか聞くとうらやましいなっていうのはあります。

何か、何をするにしてもお腹を何か、気をつかわなくちゃけなくて、遊びにも行けないし、うん、すごい大変だなって．．．自由じゃないし．．．たばこ吸えないとか。やっぱりお腹によくないと思ったし、変な子生まれてきてもうれしくないから。だから止めて、あ、たまに吸いたくなる時もあるんですけど、あと少しの我慢だし。

.....

気遣ってくれて、ほんとうれしなあって感じです。

妊娠してあんまりまわりの人にあんまり気を遣ってほしくなっていくか、普通に扱って欲しいっていうか。ずっと立っていると疲れるでしょうとか、気にしてくれるのはうれしいけど、逆にあんまり気にしすぎるともうどっちも疲れちゃうから、気にしてほしくないなあっていうのもあるし。

まわりの方が変わったかなあ、何か．．．だからもうすごいちやほやされて育ったっていうか、怠けるような気がする自分で．．．毎日することなく暇、ぼーっとしてて、こんなんでいいのかなあって。体重は増えないようにって言われているのに、ぶくぶく太っていくし。だからもう暇で暇でしょうがない．．．すごく縛られている。何するのでもいちいち許可がいるし．．．自分は普通にしようと思ってるけど．．．甘やかされているなって思った．．．精神的にはすごい楽だし、うれしいんだけど、何か自分が怠けているような気がして嫌だなあ、ちょっと。普通に生活したいなあって、うん。好きなもの食べて、好きなことして。

(2) 暇で退屈な生活と疎外感

妊婦としての生活は暇で退屈であると多くの妊婦が述べていたが、これは同世代の友人との付き合いが少なくなり、まわりに似たような十代の妊婦もいないことが要因となっていた。同級生は学校や仕事で忙しいのに、妊婦自身は暇という状況は妊婦に疎外感をもたらしていた。しかし、一方ではそれはしかたないという受け止め方もみられた。

仕事してないから、日中家にいるのもすごいつまらないし、バランスが崩れちゃって、日常生活のバランス崩れてちゃって、これはいけないなあって。

会った時しか話さない。みんな専門学校とか行ってて、仕事してるから、昼間いないですよ。だから昼間はひとりぼっちですよ。

みんな忙しい時間に暇っていうのが、すごい嫌だなとか、一番大きい。やることないっていえばないですよ、何かあればしたいけど。妊娠してる人の仕事ってないじゃないですか、絶対どこもとってくんないとか。私あんまりじっとしてるのって好きじゃないんですよ。だから動く事が好きだから、家でじっとしてるのが一番すっごい嫌です。あとはないかな。

今だったら仕事もしてないし、家にいるだけだから。そんな人と、働いてもいないから2人、他の人と触れ合うこともなく、静かに暮らせるかなあって。まあ、その分、暇で寂しいなあとすることもあるけど。．．．うん、すごい暇だけど、ああ、でも今働いているよりぼうっとできていいなと思うけど。まあ太る一方だし、お金はたまらないしなあって考えてしまう。

あ、みんなどうしてるかなとか思いますけど。でも私は私でこれからやることあるし、って。子供が生まれたらちゃんとみんなに手紙だそうかなあとか思って。．．．もう全然とってないですね。家にいた時は一番仲の良かった子がたまに顔を出してくれたけど、今はもう全然ない。．．．ただ友達と別れるのがいやだからとか思って。けどどうしようがないです。

(3) 体重増加と体形の変化

妊娠週数がすすむにつれて、体重増加や腹部の増大はさけることのできない身体的な変化である。十代の妊婦は体重は増やしたくはないけど増えていくしという体重コントロールの難しさを訴えていた。また体形的にも変化していくので、太るという否定的なイメージを持っていた。しかし、これは妊婦が言ってる程には悲愴感はなく、あまり気にしないという妊婦の言葉からは、妊娠に伴う現象として捉えている部分もあるように思われた。

仕事をしなくなった途端、太ってきちゃったから、もう嫌だっていう感じで。．．．何か知らないうちにふとちゃってるんですよ。．．．いやあ、助産婦さんは53キロまでって言うんだけど、私はもう増やしたくないなあって。でも増えるから、まあ増えるところまでいくのかなあって。

うん、太るのは筋肉とかじゃなくて脂肪になってるから。子供産んだ後ポヨンポヨンかなって、なかなか多分もどれないと思う。．．．だから今60キロぐらいまでいかないように考えてるんだけど、うん、今の調子じゃ、どうかなあって。

身体が重いですよ、妊娠前とはこう。だから、腰もお腹も痛くなってきてるから、こう嫌だな、嫌だなあーとは思ってたけど。

嫌です。ちょっと見た目が悪いですね。ちょっとお腹でてるのも、ちょっとかっこ悪くなってると思いますし。でも、うん、反対に大きくなって、皆に妊娠してるのよみたいなことを見せたいし、うん。別にそうですね、体形のことは。

考察

以上17名の妊婦への面接調査から、社会・文化的な背景を考慮した上で、何故彼女達が子供を産みたかったのか、妊娠の継続を決意するまでの経過とその後の十代妊婦としての生活を心理・社会的な側面に焦点をあてて、十代妊婦の主観的経験を記述した。妊娠の継続にあたっては産むか産まないかの自己決定について、その重要性を尊重しながらその後何が派生してくるのかを考えていかなければならない。例えば、中絶をした場合、心情的な打撃が伴うであろうし、妊娠を継続した場合、社会的・経済的な問題が生じてくることは、この面接内容からも明らかである。そこで、それに対して医療・社会福祉面からどう対応していくのか、また十分な対応ができていくのかということを考えていく必要がある。面接した多くの妊婦は家族の支援が得られていて割と恵まれている状況にあった。逆に言えば、家族の支援があったからこそ、産む決意をしたとも言える。しかし、この家族の支援だけを頼りにしていいのだろうか。

確かに望まない妊娠を避けることが先決なのだが、必ずしも全員が望まない妊娠ではなく、積極的に子供を産みたい、自分達で考えてやっていこうとしているカップルもいるという現実をどう受け止めていくのかということ、特に学生である場合、中絶または退学しかないような状況があるという話から、望む妊娠の場合、本当に学業と妊娠を両立することは難しいのだろうか、何が妨げになっているのかなど、十代女性からみた妊娠、出産に関しては考えるべき課題はたくさんあるように思われる。ここでは十代妊婦に対する社会的な支援はどうあるべきか、主に学校と妊娠の関係、妊娠中の経済的な援助、妊婦への保健指導等について提言するとともに、この研究の限界や今後の研究課題についても言及する。

1) 学校と妊娠との関係

この面接調査は妊娠を継続している十代の妊婦を対象におこなったが、彼女達の話からは学生で妊娠をした場合、学生と妊婦の両方の役割を担っていくことは困難であるという状況が明らかにされた。ここである妊婦の話を用いる。

うん、そうねえ、やっぱり妊婦の待遇をよくして欲しいね、国の、そういう面をね。やっぱり学校行ってても行けるように、やっぱりアメリカみたいにそういうふうだね。行きながら両立できてっていう、選択肢を自分でとれる。そんな育てながらとか、妊娠していても勉強できるのに、あえておろすんだったら、あれだけど、ね、おろさずに。おろさざる得ないような状況に追い込むんじゃなくて。それで中絶する子とかあるから。

これは面接の最後に何か話しておきたいことはありませんかという問いに対しての妊婦の話である。この妊婦は高校生の時に中絶をしたのだが、妊娠をすれば即退学か、中絶するしかないというのではなくて、妊娠していても学業が続けられるようであればいいのと言っている。

学校では妊娠して子供を産む場合は即退学という規則は特にないようである(古賀、1996)。しかし、一般的な社会規範の影響から学業を続けるとすれば中絶、妊娠を継続すれば退学

というように選択肢が限られている。妊娠するのであれば卒業してから、子供を産むのなら結婚して、できれば妊娠そして結婚という順番でという一般的な社会規範は妊婦自身も自覚しており、これらは無視できないものであった。十代妊娠は必ずしも望まない妊娠ばかりではないことを考えると、子供を産みたいという彼女達の意志を尊重して、学業の機会を奪わないような支援が必要なのではないだろうか。例えば、通信教育に切り替えるとか、一時的に休学の制度を設ける等が考えられる。

次に望まない妊娠について考えてみたい。この面接調査では何人かの妊婦は妊娠を全く予測していなかった。それはもちろん避妊をしなかった、または避妊に失敗した結果であるが、更に彼女達の避妊に対する知識や意識、そして実践の問題とも関連があった。生殖機能についてちゃんとした知識をもっていなかったり、避妊は男性の責任であると考えていたり、知識はあっても、特にコンドームを使用する場合、相手の協力が得られにくいなどが面接内容から把握できた。また過去に中絶を経験した妊婦がいたことから、パースコントロールとしての中絶が頻繁に行われている事実は、十代妊婦も十分に認識していた。そこで、十代は大半が学校という組織に属するために、学校における性教育の果たす役割は大きいと思われる。その更なる充実を望みたい。

2) 妊娠中の経済的な援助

妊娠中の経済的な困窮に対しては主に妊婦の家族がその援助を行っていた。ある妊婦の話では新婚補助というような住居費の一部を支給する制度を設けている自治体もあった。また自治体からの借り入れや分娩費の給付制度を利用するようにしている妊婦もいた。しかし、妊娠中の生計をちゃんと立てて、出産時に約30万円のお金を支払うという経済面の心配は十代妊婦にとって深刻な悩みであった。これは生活収入を夫に頼らざるを得ないという十代妊婦の社会的な背景とも関連している。例えば、夫の年齢や学歴により職種が限られると十分な収入が得られないことである。経済的に困窮することがわかっていれば妊娠しなければいいのにとまってしまえばそれまでであるが、何人かの夫は妊娠後に生活を支えようと熱心に仕事をしている様子が伺えた。このような現状を踏まえた上で、家族の支援だけを頼りにしていいのだろうか、社会福祉面でできることはないのだろうかと考えさせられる。

まず、初期の妊婦健診において、妊婦の経済的な状況を十分に把握した上で、利用できる社会福祉制度があればそのことを妊婦に伝えることが重要である。中には両親とそういう情報を一緒に捜し求めたと話した妊婦もいた。

次に、十代女性で経済的に困窮している場合、いろいろな保険制度の利用・改善が考えられる。例えば分娩費の給付制度の利用はもちろんのこと、ある妊婦が述べていたように出産・入院費用の分割払いを認めるとか、出産育児一時金に相当する額を病院が立て替えて、出産時の経済的な負担を軽くするなど、柔軟に対応する政策が望まれる。また妊婦健診についても保険が適用されれば、毎回多額のお金を支払わずに済むと思われるが、どうであろうか。

3) 妊婦への保健指導

十代妊婦と面接をしていて、時々いろいろなことを質問されることがあった。妊婦健診では一人一人の妊婦に対してなかなかゆっくりとした時間がとれないこともあり、十代妊婦は話をしにくいという印象をもっているようであった。また保健指導が行われているのだが、妊婦自身はあまり守っていないとか、怒られているような気がしたと話していた。また妊婦の生活は妊婦としての規制がある中で、友人と会う機会も少なくなり暇で寂しいと述べていた。なかには面接されることが苦痛であった妊婦もいるかもしれないが、ある妊婦にとっては面接そのものが話を聞いてくれる場になって、気晴らしをしているような印象も受けた。

これらのことから妊娠中の保健指導のあり方を再検討し、十代妊婦同志のサポートグループ等の設立が望まれる。特にまわりに十代妊婦がいない場合、例えば、十代妊婦が望めば、各病院で妊婦同志の連絡網をつくり、お互いに電話で話をしながら情報交換をすることなど可能ではないだろうか。

保健指導に関しては、助産婦外来などを設置している施設もあるが、十代妊婦にとってはプライマリ・ナーシングのような形式で1対1の関係を妊娠の初期から形成することが望まれる。そうすることで医療従事者と十代妊婦との人間関係も親密なものとなり、看護コードの把握やそれに対する看護実践もしやすくなるのではないかと思われる。そして、これは言うまでもないことであるが、十代妊婦の話を十分に聞くという姿勢も重要である。

4) 研究の限界と今後の課題

この面接調査に関しては、研究方法の面で様々な限界がある。それを理解した上で今後の十代妊娠における研究の課題を考えてみたい。

面接した結果、対象者の特徴は年齢は17才から19才の十代の後半に当たる年齢層であったことと、婚姻状況は一人を除いて面接した時点では結婚をしていたことがあげられる。これは妊娠を継続するにあたり、学業との関係や入籍した方が社会的に受け入れやすいという社会規範との関連が強いことを反映している。そこで年齢が17才以下の場合はどうなのか、そして未婚で出産する場合はどうなのかという点で、今後これらの妊婦も含めた研究が必要であろう。

また妊娠週数に関しては、今回妊娠20週以降としたが、面接した妊婦は比較的早い時期に妊娠の継続を決意していたことが判明した。妊娠週数の初期に面接をすることで、より鮮明な妊娠の継続への決意過程が把握・理解できるものと思われる。

次に妊娠の継続には、やはり家族の経済的・心理的な援助が大きく作用していた。そこで妊婦のみならず、相手や夫、そして家族、特に妊婦の母親等を含めた面接調査を行うことで妊娠中のよりダイナミックな家族関係が把握・理解できるものと考えられる。しかし、面接の内容が繊細になることも予測されるので、別々に面接することが望ましいと考える。

面接は今回妊娠中に1回限りとしたが、妊娠の初期から出産まで継続的に面接することで、妊娠の経過に伴う密度の濃い主観的な経験を記述・理解できるものと思われる。更に、出産後についても十代母親の育児等に関連した問題はないかなど、縦断的研究により経過を追っていく必要がある。

この面接調査は対象者も17名と少ないことから、これらの結果を一般化することは難しい。しかし、十代妊婦が直面している状況を把握・理解する手立てとし、今後の保健医療活動の中で生かしていけるようにしたいものである。最後に、この面接調査に協力していただいた施設の関係者各位および十代妊婦の方々に心から感謝の意を表したい。

文献

- 1) 厚生省：母子保健の主なる統計、平成7年度：1996.
- 2) 古賀詔子：中学生・高校生の妊娠を考える、ワークショップ「わが国のリプロダクティブ・ライツを検証する」、第37回日本母性衛生学会学術講演会：1996.
- 3) 松本清一：思春期の月経前症状、理事長講演、第15回日本思春期学会学術総会：1996.

Abstract

Subjective Experiences of Pregnancy among Teenagers

Miciko Machiura

This descriptive study explored the subjective experiences of pregnancy among 17 pregnant teenagers after 20 weeks of pregnancy. From the psychosocial perspective, interviews were conducted to investigate motivations for becoming pregnant, reasons for having a baby, perceptions of being pregnant, and managing pregnancy.

Sixteen pregnant teenagers were married at the time of the interview. Although some teenagers planned their pregnancies to change their life styles, most pregnancies were unplanned. Those who had unplanned pregnancies gave the meaning of pregnancy, such as the importance of the baby's life or avoiding abortion, to continue the pregnancy. Almost half of the families disagreed with continuing pregnancy. Eventually, the families agreed to have a baby. The families were the major source of financial and emotional support for pregnant teenagers during pregnancy.

After once becoming socially acceptable pregnant teenagers, they stayed at home and their socialization opportunities with friends were diminished. They talked about that life as a pregnant teenager was boring and lonely. There was a difficulty with controlling their weight gain during pregnancy. However, they perceived that they could not help it because of pregnancy. After quickening, they mentioned their affective feelings toward the unborn child. Fetal movements also strengthened their awareness of becoming a mother.

In the end of this paper, implications for social policy are addressed in terms of school and pregnancy, financial support, and health care services. Limitations of the study are also discussed.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

十代で妊娠を継続している妊婦 17 名を対象に妊娠 20 週以降に面接調査を行った。妊婦の心理的、社会的な側面から、妊娠の動機、妊娠継続の理由、妊娠をどう受け止めているのか、また妊娠にどのように対応しているのかなど、十代妊婦の妊娠中の主観的経験を探求した。

面接時は 16 名が入籍を済ませていた。妊娠の動機は自分の生活を変えたいと思って積極的に妊娠した者もいたが、大半は予定外妊娠であった。しかし予定外妊娠の妊婦は妊娠を継続するにあたって、子供の生命の大切さ、また人工妊娠中絶を避けたいなど、あとで妊娠の意味付けを行っていた。約半数の家族は妊娠の継続に反対であったが、最終的には同意して、妊婦への心理的経済的な支援の役割を担っていた。

妊娠中の生活については、妊娠の継続を決意したものの、仕事や学校をやめて家にいることが多く、友人とも疎遠がちになり、また回りに似たような妊婦もいない為に、暇で寂しいと述べていた。また妊娠中の体重コントロールは難しく、体重増加の心配をしている反面、妊婦だから仕方がないと受け止めている様子が伺えた。しかし、胎動を契機に胎児への愛着感情を述べており、母親になる意識の芽生えも見られた。最後に、社会的な支援のあり方として学校と妊娠の関係、妊娠中の経済的な援助、妊婦への保健指導等について考察した。